

# これからの デザインの在り方

新しい美的造形の開拓を  
目指して



現代社会はデザインなくして考えられない。それは、各地で毎年開催される地域デザイン会議の隆盛からも伺える。今年は京都が開催地に選ばれ、3月23日・24日の両日、国立京都国際会館で「地域デザイン会議'93 京都デザイン会議」と銘打ち、華々しく行われた。テーマは「京都デザイン・ルネッサンス―地域から世界へ」。23日は、日本におけるルネッサンスを中心とした講演、パネルディスカッションが、京都市立芸術大学学長、上山春平氏、他各氏により展開。また24日は、日頃デザインを職業とするデザイナーによるトーク・セッションが催され、この一環として、本誌編集長、元橋一裕のコーディネートによる「京都発デザイナー・マインドとそのカタチ」と題したプレゼンテーションとトーク・バトルが行われた。プレゼンターは、和装、インテリア、建築、環境、カメラマン、コピーライター、染色、寝装といった各分野で常にデザインと関わりをもつ12人の面々で、各自の仕事ぶり、作品などをスライドを通し紹介。その後異業種ではあるが、デザインという一線つながる各氏が、それぞれの視野から、京都及び日本における在り方を、商業デザインや作品をベースに、現状と今後の展望についてトークを繰り広げ、多様な内容と、各氏の熱意のため多少時間をオーバーしての閉会となった。

ライター／西野真理

# FAME REPORT



## 一〇〇年後の 首都宣言

一三〇〇才の京都を  
考える青年たち



「京都首都宣言」を旗印に、京都商工会議所青年部のNEOMIX京都青年サミットが約50団体、総勢四五〇余名の参加者を集めて、3月20日、京都リサーチパークを会場に開催された。環境と調和した開発や、快適な生活空間を創りだすスピリットをもった京都の町衆文化は、堀場の言うハイテクとの融合に、堀場の製品ならぬ堀場の文化が世界的に受容されている点との共通項があること、京料理人の立場から園部氏は、地の物を使った真の京料理百年先を危惧しながら京都府民二四〇万の手造りを提案し、伝統産業青年会長の野田氏は、営々と引き継がれてきた工芸の技術を、その心を合わせ持つ京都の人間が、京都の町のために、次世代へとさらにそれを引き継ぐところに百年後を見出し、裏千家の伊住氏は、文明主導から文化主導への新しいキーワードの下、連帯を強調した。

やや観念論に終始したキライはあるもののイタリヤードの北村氏からの発言にあった「若衆の会」が、京都の青年に華々しい活力を与えるキッカケをもたらし、コーディネーター松岡正剛氏の言う「稼ぎ」と「努め」に代表されるかつての日本人の働き方を思い起こし、努めを果す京都づくりへ正に踏み出さんとする熱気を感じさせていた。

ライター／千一歳子

## 北山通りの色が 変わる。

人を取り込む開放された街へ



北山街協同組合が呼びかけ、京都府、京都市、京都商工会議所の協力を得て、実現したカラー舗装。テープカットの際の感慨もひとしおだ。



4月10日、11日。何やら北山通りがにぎやかだった。何かが違うのである。そういえば、歩道もライトピンクに変わっている。これはどうしたことなのだろうか？

まずは歩道の石畳、中国から取りよせた「みかげ石」である。これで殺伐としたイメージが一新された。それに街の随所で、ジャズベースト福呂和也、アコースティックユニット「唄市」らがストリートライブを展開している。実はこれ、石畳のカラー舗装完成を記念して行われた「北山ストリートパフォーマンス」の一環で、他にも表千家の協力で植物園内にお茶席をもうけたり、参加費無料のフォトコンテストが行われた。10日には白虎社の出前芸術体がゴールドパフォーマンスを披露してくれた。

このイベントを仕掛けたのは昨年8月に行われたフリーマーケット同様、北山街協同組合。「商店街の活性化だけでなく、全体的な視野で見たイベントを実現したかった」という言葉通りになったワケだ。ストリートパフォーマンスを統括したRAGの須田晃夫氏も「普段からこんな開放感あふれる街になればね。そのうち歩行者天国になればいいなあ」と気さくに語ってくれた。魅力ある街としてのカラーを持ちはじめた北山通。次のイベントではどんな色を見せてくれるか、今から楽しみである。